

# 鈴木由次郎先生との思い出と學問

濱 久 雄

## 一、鈴木先生の思い出

鈴木由次郎先生（一九〇一—一九七六）は、大東文化學院高等科の第一期の卒業生で、同期には國學院大學教授で『巫系文學論』を著した藤野岩友先生、大東文化學院教授で五十代で戦後死去され、『支那韻文史』を著した澤田總清先生、神宮皇學館大學教授で『支那學藝大辭彙』を著した近藤李先生らがおられる。

私が昭和十八年に大東文化學院に入學したとき、先生から『十八史略』を學んだが、テキストは白文で、舊制中學時代とは異なり、さすが漢文の専門學校に入學したという實感に浸った。先生は容貌魁偉で大柄な方であり、太い聲でゆっくり淡々と漢文を讀まれ、一見、近づき難い雰囲気であった。しかし、時々意味不明のうす笑いをされたが、それが近づき難い先生に親しみを覚える一瞬でもあった。先生の授業は一年生の時だけであったが、戦後の昭和二十四年、私が中央大學舊制法學部に入學したとき、たまたま東洋哲學の科目を選択したが、大講堂での授業を多數の學生が待つ中で、悠然と先生が現れて來られ、再び先生の聲咳に接することとなった。淡々と太い聲で講義をされる様子は少しも變らなかつた。先生は中央大學教授として『東洋倫理思想史』、『中國哲學思想史』などを著されたが、専門は『周易』の研究で、昭和三十八年三月に『漢易研究』を明德出版社より上梓され、その翌年に『太玄易の研究』を同じく明德出版社よ

り上梓された。そして昭和四十九年一月に『易經』の全譯本を集英社より上梓した。これは實に先生の三部作ともいふべきものである。先生が漢易の研究者となった理由は、熊本出身の古城坦堂（諱は貞吉）先生の示唆に基づくことが『漢易の研究』の跋文によって明らかである。この跋文は漢文で書かれている。左にその書き下し文を掲げたい。

余、往日、熊本に過り、古城坦堂先生の墓に展す。因りて憶ふ。昔、先生、余に學の方を誨ふ。且つ告げて曰く、宜しく兩漢學術の源流を考ふべしと。歲月流るるが如く、荏苒日を空しうす。首を回せば、將に三十年に垂んとす。余は易に於て、未だ必ずしも得るところ有らず。況んやその他をや。今ま漢易研究の刻成る。敢て先生の言に對ふと謂ふにあらざるなり。また讀書の餘滴のみ。先生は漢學に於て尤も邃し。今や墓艸已に宿せり。何れの方に於て門を叩くの地を得んや。轉た秋風落莫の感に堪へざるなり。昭和壬寅（三十七年）晚秋、眞讀書樓に於て、鈴木由次郎識す。

古城坦堂はわが國で初めて『支那文學史』を著した學者で、かつて明治の三大文宗のひとりであった三島中洲の漢文を海鼠がへどを吐いたようだと酷評したことは、猪口觀濤先生から聽かされたが、漢代の學術にも造詣が深いことを知り、興味を覺えたことであつた。

## 二、『漢易の研究』について

漢易の研究はその難解さのためか、研究者は極めて少ない。東洋大學教授であつた小澤文四郎先生も昭和四十五年に、明德印刷出版社より『漢代易學の研究』を上梓されたが、特に清朝の惠棟・張惠言・宋翔鳳・焦循・陳澧・皮錫瑞らの見解を多く引用されているのが特色である。もっとも、漢代易學は清朝において研究が深められた關係で、鈴木先生も

紹介しているが、その質と量において、小澤先生の方が詳細をきわめる。そのせいか、古書肆の価格は小澤先生の方が高い。需要が多い反面、その出版部数が少ないためかも知れない。とにかく両者の記述にはそれぞれ特色がある。

鈴木先生は、第一部において漢易源源考を取りあげ、前漢の易學と後漢の易學の展開を跡づけ、さらに三國・六朝の易學にも言及している。そして第二部を漢代象數易の研究とし、象數易の展開として、消息・卦氣・世應・爻辰・月體納甲・八卦方位・卦變・昇降・旁通・互體等の特色を擧げて、漢代思想上の象數易の地位を明らかにされ、さらに象數易と陰陽五行思想につき詳述する。そして特に讖緯學の特色に言及されている。小澤先生とは異なり、鈴木先生は特に揚雄が著した『太玄經』と、焦延壽が著したといわれる『焦氏易林』を取りあげ、さらに『周易參同契』の研究に及び、漢易の範疇の及ぶ範圍を擴大して把握されようとするところに特色をもつ。このほか、附録として易緯乾鑿度の譯注を試みられ、底本に『古經解彙函』と『武英殿聚珍版』を用い、清朝の張惠言の『易緯略義』を参照されている。これらの業績は後學を裨益すること絶大である。しかもこれらが訓讀漢文で残されたことに意義があるといえよう。

ところで、大東文化大學東洋研究所で出版された『東アジアの天文曆法に関する多角的研究』の中で、私は「中國古代における易と曆法の牽連關係」という論文を發表したが、これは私が大東文化大學中國文學科を退職した後も、引き続き東洋研究所の兼任研究員として古曆研究班に所屬して、『高麗史』曆志の宣明曆に関する漢文資料を解讀する中で、漢代象數易の卦氣說に關連する記述に興味を抱き、關連資料を丹念に集めて書き上げたものである。これは實に西漢の教學體系の中核となった公羊思想と象數易との關連、ならびに孟喜・京房らによって確立された卦氣說が緯書とも關連が深く、自然法秩序に基づく宇宙論と大地に根ざす農事曆を合一的に把え、易經の天地人の三才を貫く天人合一の思想を確立していることに改めて興味を覚えてまとめたものである。しかも、宋代の邵雍の象數易とは異なり、占候を重んじる實學的側面が顯著であり、卦氣說に批判的である學者でさえ、その實用性に着目して一概にこれを排除していない

ことは、清の黄宗義の『易學象數論』、胡渭の『明圖明辨』、俞樾の「卦氣直日考」に記述された見識の中にも窺われる。私は執筆中に、鈴木先生の『漢易の研究』に詳述された卦氣説が、小澤先生の著書よりも遙かに優れていることに氣づいた。特に卦氣圖の一覽表は、圓形で示された卦氣六日七分圓圖を平易にまとめたもので、特に七十二候の「蚯蚓結みみず」より「荔挺生れいていず」に至る短文の読み方にふり假名を付して平易に書かれ、さらに『易緯通卦驗』に記された二十四氣・七十二候と『新唐書』所載の卦氣圖や、『逸周書』時訓解の記述の差異につき、これらを比較して一覽に供している點はきわめて参考となる。

### 三、『太玄易の研究』について

漢の揚雄が著した『太玄經』は『易經』に擬して占筮のために著した書で、『易經』よりも合理的な組織體系を備えている。揚雄は漢代に盛行した律曆・天文・陰陽五行の知識に基づき、獨創的な太玄思想を構成し、儒家や道家の倫理思想によって繇辭ちようじ（占いのことば）を作った。鈴木先生は一代の博學能文の揚雄ならではできない著作で、まさに絢爛たる漢代易學の一大展開と評價され、その著述の目的は仁義の宣揚にあったとされる。そして揚雄のいう運命は、陰陽消長の原理としての太玄、つまり老子の玄であり、それは十翼（易の彖傳・象傳・文言傳・繫辭傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳）の運命を宇宙の正理とみる哲學的思考を一脈相うけたものであると斷定される。

『太玄經』の形式は『易經』になぞらえ、易の六十四卦に對し、『太玄經』には八十一首があり、一卦の六爻に對し、一首ごとに九贊があり、卦辭に相當するものに首辭があり、爻辭に相當するものに贊辭がある。易の三百八十四爻にはそれぞれの爻辭を解説する象辭しやうじ（小象）があるが、『太玄經』の七百二十九贊にはそれぞれの贊辭を解説する測辭が

ついている。鈴木先生は揚雄の『太玄經』をあえて太玄易といわれるが、その理由はこの書が『易經』の支脈であり、古來、思いを『易經』に潜める人士の兼ね治めたところであるからだ。「あとがき」に記している。また先生は揚雄を漢以來、孟子・荀子と比肩するほどの醇儒と稱されたが、朱子などが、彼が王莽おうもうの大夫となった理由で彼を腐生と評したのに對し、王莽の専制の世にあって性命を全うするために、彼がとった行動もやむを得なかったと辯護され、南宋の學者たちが偏狹な道學者的見解で揚雄の著書を輕視する態度に疑問を投げかけておられる。鈴木先生は比較的長期間にわたって揚雄の著書を坐右に置かれ、その譯注にとりかかってから十年になると告白される。しかも「定評のある難物で、中には止むを得ず意を以て解したところもあり、思わぬ誤りがありはしないかと恐れる」と記しているが、とにかく『太玄經』の全文を訓讀された功績は高く評價されるべきであると思う。

なお、先生は集英社から『易經』上下の全譯本を出版されたが、漢易を研究されても、その解釋は象數易に基づいているわけではない。なぜならば、漢易は象數を本にして作られたものでない易辭を後からいちいち象數に當てはめて解釋しようとするため、勢い牽強附會におちいり、また解釋上、類に觸れて象を増益するため、いよいよ支離繁雜に流れざるを得ない。したがって、象數易に基づく『易經』の解釋學には幾多の難點が伴うことを先生自ら認めておられる。一方、象數易を否定して義理に基づく易の解釋を確立した魏の王弼の易に對しては、老莊思想で易を説いたとしても、それが眞に易の理解に資するならば、あえてとがめるべきではないとされ、また王弼の易說が象數易を排した點では、人事に偏って天道をおろそかにするきらいがあると批判される。

王弼の易注が出てから數百年間にわたり、その易說が隆盛を誇ったが、宋代になり、程頤（伊川）の『易傳』と朱熹の『周易本義』が出て、儒教に基づく義理易が支配的となった。特に朱熹の易說は程伊川の義理易と邵雍（康節）の象數易を合せて發揮したものである。わが國の古學派である伊藤仁齋・東涯父子も漢易と王弼の易を採用せず、次善の策

として程傳朱義に基づいて『易經』を解釋した。伊藤東涯の『周易經翼通解』がこれである。

このほか、明の來知徳の『周易集註』と何楷の『古周易訂詁』も我が國では廣く讀まれ、明治時代に東京大學教授であつた根本通明博士の『周易象義辨正』にはこの兩者の易說がしばしば引用されているのである。したがって、鈴木先生の解釋も廣く諸說を紹介され、必ずしも漢易に従つて『易經』を解釋しているわけではない。とにかく『易經』解釋の名著である。

以上